

# 日本語学習者の作文における文章構成と説得力の関係

## The Correlation between Text Structure and Persuasiveness

### in Essays Written by JFL Learners

石黒 圭

#### 要旨

本研究は、日本語学習者が執筆した作文の文章構成と、その作文が有する説得力の高さとの関係を論じたものである。文章構成については、段落分けと文章型の観点から検討を行った。段落分けについては、一定の話題のレベルで区切るようにし、段落構成に一貫性を持たせること、段落分けを細かくしすぎないようにし、話題のまとまりを明確にすることが重要であることを示した。また、文章型については、超絶レベルに達していない学習者には、両括型か頭括型でしっかり書けるように指導するのが望ましいこと、尾括型を使う場合には、冒頭部で焦点となる疑問や観点をあらかじめ示すと読みやすくなり、分括型は主題文を繰り返すのではなく、主題文を間接的な表現に言い換えるようにすると、文脈効果が高まり説得力のある文章になること、中括型や潜括型は一般に避けたほうがよいことを示した。

**キーワード：**文章構成、文章型、作文評価、作文指導、good writing

#### 1. はじめに

近年の学習者コーパス、とくに日本語の作文コーパスの充実は著しい。JSL 環境のものだけでなく、JFL 環境のものも充実し<sup>1</sup>、背景となる母語も多言語化し<sup>2</sup>、母語訳との対訳があるものもある<sup>3</sup>。また、誤用タグが充実したもの<sup>4</sup>や、日本語の各レベルを網羅したもの<sup>5</sup>、ジャンルを意識して設計されたもの<sup>6</sup>などもある。

本研究で問題とするのは、比較的長い作文の文章構造である。これまでの作文コーパスは400～600字程度のものが中心であり、文章における結束性や文章の全体構造を分析するには不向きであった。そうした空隙を埋めるべく構築されたのが、金井勇人氏を中心となって構築した「JCK 作文コーパス」である。2000字以上の長さを持つ説明文・意見文・歴史文から構成された作文コーパスであり、作文のローカルな表現だけでなく、グローバルな構造を検討できるようになったのは大きな進展である。それを利用した研究成果は、石黒編(2017)として刊行される予定である。

<sup>1</sup> たとえば、海野多枝氏を中心となって構築された「日本語学習者言語コーパス」。

<sup>2</sup> たとえば、迫田久美子氏を中心となって構築している「多言語母語の日本語学習者コーパス」。

<sup>3</sup> たとえば、宇佐美洋氏を中心となって構築された「作文対訳データベース」。

<sup>4</sup> たとえば、仁科喜久子氏を中心となって構築された「学習者作文コーパス『なたね』」。

<sup>5</sup> たとえば、鈴木智美氏を中心となって構築された「JLPTUFS 作文コーパス」。

<sup>6</sup> たとえば、金澤裕之氏を中心となって構築された「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」。

本研究で扱う作文データは、黄明侠氏(ハルビン師範大学)が独自に収集したものであるが、黄氏は「JCK 作文コーパス」の構築のさいに協力しており、そこで学んだノウハウを生かして今回の作文データを構築している。本研究では、この作文データを用いて、一つ一つの作文の全体構造とそれぞれの作文が持つ説得力との関係を考えたい。

## 2. 本研究の目的と先行研究の関係

前節に示したように、本稿は文章の全体構造を問題にする研究である。そのため、参照すべき日本語学の研究分野としては文章論、なかでも文章型の研究が挙げられる。

文章全体をとおして、書き手が伝えたいメッセージを文章中のどこに位置付けるかということ論じた文章型の研究は、五十嵐(1905)のレトリック理論に端を発している。それが、文章論研究史のなかで市川(1978)によって受け継がれ、佐久間(1999)によって再整理が施され、研究の態勢が整ったといえる。

本研究では、佐久間(1999)における頭括型、尾括型、中括型、両括型、分括型、潜括型という六つの類型を用いることにする。文章全体を、冒頭部・展開部・終了部の大きく三つに区分した場合、書き手の伝えたいメッセージ表す主題文(を含む中心段)が冒頭部に位置するものを頭括型、終了部に位置するものを尾括型、展開部に位置するものを中括型、冒頭部と終了部の双方に位置するものを両括型、展開部を含めた複数の箇所位置するものを分括型、書き手のメッセージが明確な主題文が表現として確認できないものを潜括型とする。書き手の伝えたいメッセージの表出箇所によって、文章の説得力がどのような影響を受けるのか、日本語学習者の作文を例にその関係を考えることを本研究の目的とする。

文章の説得力を考える場合、文章の評価を考えることになる。日本語教育の評価の研究としては、宇佐美(2014)や宇佐美編(2016)が代表的であり、文章の評価の研究としては田中真理氏を中心とした一連の *good writing* の研究が参考になる(田中・長阪・成田・菅井(2009)、田中・坪根(2011)、田中・阿部(2014)、坪根・田中(2015)など)。

田中氏の一連の研究は、*good writing* とは何かということを一貫して追求したもので、日本語の表現として不自然なものを修正するという誤用研究から大きく一步踏み出す研究である。田中氏によって示された *good writing* のモデルは、「悪い表現を直す」という誤用研究から「よい表現を追求する」というライティング研究に進んだという意味で、日本語上級学習者や日本語母語話者にたいしても適用できる枠組みとなっている。

本研究は、佐久間(1999)に代表される文章型の研究、田中・阿部(2014)に代表される *good writing* の研究を踏まえ、文章型と文章の説得力がどのような関係にあるのかを分析・考察し、それを日本語教育の作文指導へと発展させることを目指したい。

## 3. 調査の資料

調査の資料は、黄明侠氏が収集したデータを用いる。資料の収集は2014年4~5月にハルビン師範大学で行われ、日本語能力試験 N2 に合格レベルの能力を備えた、ハルビン師範大

学の2年生、3年生、4年生各20名<sup>7</sup>、計60名が「思い出を残すのに、写真（静止画）とビデオ（動画）のどちらがいいか？ いずれかの立場を選び、理由とともに説得的に示してください。分量は1500字程度とします。」という指示で、パソコンで書いた作文を対象とする。なお、実際の執筆環境に合わせるため、時間の制限はなく<sup>8</sup>、辞書などのリソースの使用は認めている。

それぞれの作文を、①何段落で書かれたか、②どの文章型で書かれたか、③写真とビデオのいずれが選ばれたか、の三つの観点で調べた。文章型を判断するさいに参考になる書き手の伝えたいメッセージを表す主題文は、佐久間（1999）を参考に筆者自身が判定した。

また、作文を読んだときの主張の明確さと説得力の強さから、文章を5段階に分けた。この評価の作業も筆者自身が行った。評価については、多数の判定者の平均を取るという考え方もあろうが、評価というものはそもそも主観的であり、これまで多数の作文を読み、分析を行ってきた筆者が一貫して判定したほうが、研究としての筋が通ると考えた。判定基準は次の表1のとおりであるが、判定した結果、どの作文も比較的良好に書けており、1に該当する作文は見当たらなかった。したがって、実質的には4段階の判定となっている。

表1 説得力から見た作文評価の判定基準

- |   |                      |
|---|----------------------|
| 1 | 主張がわからず、意見文になっていない。  |
| 2 | 主張がわかりにくく、説得力に欠ける。   |
| 3 | 主張は明確だが、強い説得力はない。    |
| 4 | 主張が明確で、一定の説得力がある。    |
| 5 | 主張が明確で、強い説得力と読後感を持つ。 |

#### 4. 調査の結果

評価の結果は次の表2、表3、表4のとおりである。

表2 本調査の結果一覧

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
段落数	7	8	5	11	7	11	5	15	12	7
主題文	なし	1, 8	1-5	3, 11	1, 7	1, 10	2, 5	4	1	1, 7
文章型	潜括型	両括型	分括型	両括型	両括型	両括型	両括型	頭括型	頭括型	両括型
主張	写真	両方	写真	写真	写真	ビデオ	写真	写真	写真	ビデオ
評価	2	4	3	3	4	4	4	4	5	5

<sup>7</sup> 以下で示す番号では、1～20が2年生、21～40が3年生、41～60が4年生である。2年生は、N2合格者と、受験はしていないがN2に合格できる力を持っていると見なせる学習者、3年生は、N1合格者10名、N2合格者10名（番号では21～30がN2合格者、31～40がN1合格者）、4年生は、全員N1合格者である。60名のうち57名が女性であり、3名の男性の番号は7、16、39である。なお、本研究では、表現力とは異なり、文章構成力は、日本語力による大きなレベル差を感じられなかったため、分析のさいに学年は考慮していない。

<sup>8</sup> 依頼してから1週間以内での提出を義務づけている。

表2 本調査の結果一覧（続き）

番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
段落数	9	8	6	13	7	7	10	6	6	12
主題文	5,9	1,8	6	1,13	1,7	2,7	1	2,5	1	12
文章型	分括型	両括型	尾括型	両括型	両括型	両括型	頭括型	両括型	頭括型	尾括型
主張	ビデオ	写真	両方	ビデオ	写真	写真	ビデオ	写真	写真	写真
評価	2	5	3	4	4	3	3	4	4	2

番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
段落数	7	7	16	7	8	6	6	6	11	13
主題文	5	1,7	1,3,15	1,7	1	5,6	2,6	6	1,11	3
文章型	中括型	両括型	両括型	両括型	頭括型	分括型	両括型	尾括型	両括型	頭括型
主張	写真	ビデオ	ビデオ	写真	ビデオ	ビデオ	ビデオ	ビデオ	ビデオ	ビデオ
評価	3	3	4	4	3	3	4	3	3	3

番号	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
段落数	6	5	16	8	4	7	6	5	3	7
主題文	1	1-3,5	16	1,8	1,4	6	1	1	2,3	7
文章型	頭括型	分括型	尾括型	両括型	両括型	尾括型	頭括型	頭括型	分括型	尾括型
主張	写真	ビデオ	両方	写真	写真	写真	ビデオ	写真	ビデオ	両方
評価	4	3	4	5	4	4	4	3	4	2

番号	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
段落数	8	6	3	11	8	2	6	5	23	7
主題文	1,8	1,6	3	2,11	なし	1	1	1,5	7	2,6
文章型	両括型	両括型	尾括型	両括型	潜括型	頭括型	両括型	両括型	頭括型	両括型
主張	ビデオ	写真	写真	ビデオ	写真	両方	写真	ビデオ	ビデオ	ビデオ
評価	5	3	4	4	2	3	2	3	4	3

番号	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
段落数	9	5	11	4	5	5	6	6	5	6
主題文	2,9	1,5	6	1,4	1,5	5	1,6	6	1	1,6
文章型	両括型	両括型	中括型	両括型	両括型	尾括型	両括型	尾括型	頭括型	両括型
主張	写真	写真	写真	写真	ビデオ	ビデオ	写真	ビデオ	ビデオ	写真
評価	4	3	3	4	3	3	4	3	4	4

表3 学年と平均評価

学年	評価
2	3.6
3	3.5
4	3.4
全体	3.5

表4 文章型と本数・平均段落数・平均評価

	本数	段落数	評価		本数	段落数	評価
頭括型	12	9.25	3.67	両括型	30	7.57	3.77
尾括型	9	7.56	3.11	分括型	5	5.60	3.00
中括型	2	9.00	3.00	潜括型	2	7.50	2.00
				全体		7.78	3.50

## 5. 段落と評価

まず、段落分けの結果から見てみる。段落は最小のもので2段落、最大のもので23段落であった。平均すると7.78段落であり、書き手によって多様性があることがわかる。

評価との関係を見ると、段落の多寡と評価の高低は連動しているわけではなく、段落の多

いものにも少ないものにも一理あるように思われる。ただし、段落が極端に少ないもの、多いものには指導が必要であろう。段落が極端に少ない2段落のものは、適切な段落分けがなされているとは言えず、少なくとも序論・本論・結論が表せる3段落以上で書いたほうがよいように思われる。逆に言うと、3段落であれば、筋の通った議論が可能であると思われる。次は3段落の例である。

#### 43. 一瞬の美、写真で残す

思い出を残すのに、写真とビデオはどちらがいいか？この問題について私はいろいろ考えました、一つは静止画、一つは動画、或いは一つは一時的、一つはある時間段の停留です。どちらも自分の長所と短所が持っています。

とにかく、場合によって状況が違います。例えば旅行する時、写真を撮って、静止的な景色は静止的な方法で記録して、視覚には衝撃を受けやすいです。写真を見るとき、きっとこの場所に行きたいというような感じも生み出しました。この時、ビデオに記録すれば、このような衝撃は多分感じできないと思います。景色は大体静止的なものなので、ビデオは時間的な流れを記録します。しかし、時間は誰でも同じです。どんなに大量に保存出来ても、その見るためにかかる時間も増えるわけではありません。写真画像が1万枚あれば、1万枚の画像を見る時間が必要です。動画が1000時間分あれば、1000時間かかって見なければなりません。もともと、動画の見るは視聴時間が必要なのに対して、画像の見るはまとめて見られる点が大きく異なるように思います。1万枚の画像でも、見るに必要な時間は、それほど長くないのに対して、1万本の動画を見るのは、1本が10分間であっても、1600時間以上かかります。動画を大量に記録すると、それを見るのが時間にかかって大変です。それに比べると、画像の場合は、ずらっと画像を並べて見て、見たい画像を画面一杯に拡大して見られますし、全てを見るのに必要な時間は、それほど長くはありません。1度に100枚ずつ見るのに2～3分かかるとしても、1万枚は4～5時間ぐらいで終わります。画像は比較的頻繁に見るのに対して、動画の視聴が少なくなる理由としては、時間を取られるのが大きいでしょう。動画は映像と音声が入っているので、臨場感では画像と比較になりませんが、大量に見るのは画像の方が楽なのは事実です。デジカメで撮影した画像を整理している時に思うのは、大量に撮ってあっても、フォルダ別に分けて置けば、それほど嵩張らない事でしょうか。そのせいか、どんなに大量に画像があっても、重荷に感じません。それに比べると、録画した動画は大量にとどまるほど視聴に時間がかかるので重荷に感じますね。

だから、私は写真のほうが良いと思います。<sup>9</sup>ただ一瞬の美を写真に保存して、見るのもそんなに時間がかからなくて、思い出を残すに対して、すごくふさわしいです。

なぜ写真のほうがビデオよりよいかについて、視聴に時間がかかるかどうかの1点に集中して議論を展開している。写真のほうがよいと思う根拠が一つである以上、根拠を述べる展開部の段落は一つでもよく、その意味で筋の通った段落展開ができていていると思われる。

一方、極端な多段落構成は文章を読みにくくする。次ページの例は23段落からなる。

この作文は内容がおもしろく、書き手の筆力は高いように見うけられる。しかし、段落分けで損をしてしまっているような気がしてならない。

この作文において書き手が伝えたいメッセージを表す主題文は、第七段落にある「しかし、

<sup>9</sup> 文章全体をとおして書き手が伝えたいメッセージを表す主題文は下線を付してある。

#### 49. ビデオ(動画)のメリット

科学の発展とともに記憶というものはただ人類のメンタル活動だけではなく、「写真」や「日記」や「ビデオ」などともいえる。

人間はよく何かの記憶を残すためにその記憶の場面をカメラで撮りたり録画したり詳しく日記に書いたりすることがよくある。

人の記憶には一般的に言えば記憶の曲線という原理があるといわれている。

では、「記憶の曲線」とはいったいなんだろうか。

記憶を忘れるということは記憶が完成したあとですぐ始まることである。そして忘れるコースは平均していることではないのである。最初は緩やかだがだんだんと速くなっていくことである。だから、何年が経って最初の記憶はだいたいぼんやりしているようになる。

そのゆえに、人はいつも記憶を残すことはできないと考えられる。旅行を出る時も家族のパーティーにを参加する時もみんなはよくカメラやビデオなどを持つことがある。その一瞬でなくなることを永遠に残そうと思われるだろう。

しかし、いったい何の手段が一番良いのかと聞かれたら私は「ビデオだ」と答えたと思う。その理由は何だろうか。それから説明させていただきたい。

まずは細かいことである。

「写真」ときたら静止した状態であろう。その写真で発生していることを静止した状態になっていつ見てもその一瞬も変えられない。

しかし、反面で、細かいことを忘れかねない。

例えば、写真で京子さんがうれしいそうにケーキを食べているところが隣の薫さんが泣いている。ある人はあの写真を見るとすぐ当時のことを思い出せる。しかし、もう一人はどうやっても思い出せない。そのことはよくあるのだろう。

その「ある人」は記憶にうまいことだけではなく、「写真」というものはよくある一瞬だけを残すことできるものである。

「ビデオ」で録画したことのほうは？

たぶん細かくて詳しくしているだろう。録画した風景も変えられないし、録画した人も変えられない。あの風がどのように吹いているだろう。その時のビデオをご覧ください。あの京子さんはどうしてそんなにうれしいのか。それに薫さんはどうして泣いているだろうか。その時のビデオをご覧ください。どんな細かい点も見落とすことができない。

簡潔に言えば、「ビデオ」というものは詳しく当時のことを録画することができる。数分も数時間、どんな細かい点も録画できる。

次には生きているような感じである。

人は誰でも死ということ避けられないと言われていた。残酷であるが人の人生の一部になっている。

みんなはそんなことに直面したことがあるの。友達や家族と永遠に会うことができないということである。

子供の時、一番愛しているのは私のおじいさんである。しかし、おじいさんが年を取ることとともに体がだんだん不況になって、最後は私たちから永遠に離れていく。子供の時の私にとってそれは世界一の不公平のことであった。今にもずっとうっとしいとしている。

しかし誰でもその結果を変えることができない。それは自然という神が選んだこと。人としたらみんなもその日を迎えている。

おじいさんがなくなる前にとっても多くの写真を撮らせたことがある。笑っているのも新聞を読んでいるのもたくさんある。おじいさんに会いたい時、私はよくその写真を見る。写真の中

に私のおじいさんが住んでいるようである。動けないが何も無いよりましだとよく思う。だんだん大きくなってからカメラが録画することもできるようになった。その時一番惜しいのはおじいさんのことを録画していないことだろう。

「写真」というものは所詮静止しているものだろう。撮影した人は動くことができない。しかし、「ビデオ」というものは違っている。録画した人は画面で生きているように笑ったり動いたり食べたりすることができる。録画したことの笑顔になる前はどんな表情だろう。覚えていなくてもいい。「ビデオ」というものは全部教えてあげることができる。

「写真」と「ビデオ」はどちらがいいかと聞かれたら、みんなの答えはきっとそれぞれである。しかし、その原因があるとその「よりいい」言い方が成立の価値があると思う。

いったい何の手段が一番良いのかと聞かれたら私は『ビデオだ』と答えたと思う。」という文であると考えられる。第七段落にあるにもかかわらず、筆者はこの文章を頭括型だと判定した。というのは、この第七段落までで冒頭部と見なせるからである。その証拠に、この主題文に続く文は「その理由は何だろうか。それから説明させていただきたい。」となっており、第八段落から本論、すなわち冒頭部が始まることが予告されている。そう考えると、この第七段落までを一つの段落、あるいはせいぜい二つか三つの段落で示していれば、文章の冒頭部が明確になり、全体構造を読み手が把握するときの助けになったと思われる。

また、本論も、もう少し段落を少なくしたほうが読みやすかったと思われる。展開部は、写真とビデオの細部の記録力をめぐる対比で始まるが、段落分けが細かすぎて、その対比構造が見えにくくなっている。そのあとにビデオ特有の「生きている感じ」の話が続くが、その話も段落分けが細かすぎて、話の輪郭がつかみにくくなっている。せめて一般論とエピソードの区別がわかるような段落分けであれば、もう少し読みやすかったであろう。

作文指南書には、一つの話題には一つの段落を充てることが原則であると書かれる。もちろん、これは絵空事であって、話題というもののサイズをどう取るかによって、段落のサイズは大きくも小さくもなる。今回の調査結果も、話題にたいする書き手のサイズの認識がまちまちであったことを表している。しかし、話題のサイズは完全に書き手に任されており、自由でよいと考えると、読み手に読みにくい文章になるおそれがある。大切なことは、段落分けを行うとき、一定の話題のレベルで区切るようにし、段落構成に一貫性を持たせること。そして、段落分けを細かくしすぎないようにし、話題のまとまりを明確にすることである。

## 6. 文章型と評価

文章型と評価との関係は「4. 調査の結果」に示したとおりである。両括型を選んだ者が30名ともっとも多く、かつ評価の平均も3.77ともっとも高い。頭括型を選んだ者が12名と次に多く、平均は3.67と次に高い。尾括型を選んだ者は9名で、平均は3.11である。分括型を選んだ者は4名、中括型を選んだ者は2名でいずれも評価の平均は3、潜括型を選んだのは2名で、評価の平均は2ともっとも低い。全体としては、選択者が多い文章型が、評価の平均が高いという結果になっている。

両括型を選んだ人がもっとも多いのは、冒頭部で結論を明確にして書きだし、終了部で結論を再度提示して書きおえるというサンドイッチ構造が、書き手にとって書きやすいからだろう。同時に、両括型の評価がもっとも高いのは、冒頭部と結末部で結論を一致させることで主張の一貫性が保たれ、説得力が高まるからであろう。書きやすく説得力がある両括型は、こうした意見文を書くときの基本構造であり、学習者に積極的に勧めて問題が起きにくい文章型であろう。

頭括型もまた、選んだ人も多く、かつ、評価の平均が高いので、お勧めの文章型の一つであるといえる。結論を最初に決めることで文章を書く方向性が決まり、主張の一貫性を持って書けるからであろう。ただし、頭括型の場合、両括型とは異なり、最後に駄目を押さないため、終了部がなく、言いつばなしになっているように感じられやすい。そのため、読後感が弱くなりがちである点が、指導のさいに注意すべきポイントとなる。

尾括型は日本語の文章として自然な展開であり、尾括型を9名が選んだのは納得ができる。しかし、評価の平均は3.11と、両括型や頭括型にくらべて低い印象である。尾括型の文章を読んでいると、写真がよいのか、ビデオがよいのかがはっきりわからないまま文章を読まされることが多く、後続展開の予測が立ちにくいので、読んでいてイライラさせられることが多い。「もっとも思い出を残すため、写真とビデオはどちらがいいであろうか。それでは、内容、保存、伝播、観賞という四方面に分けて考えよう。」(33. 写真とビデオ)のように、冒頭で論点が明確に絞りこむようにすれば、さほど読みにくくはない。もし尾括型で書くことを希望する学生を指導する場合は、疑問文で論点を絞りこみ、同時に観点をあらかじめ示すようにすると、読み手の予測が容易になって読みやすくなるというアドバイスをするとうまいだろう。

分括型を採用したのは4名で、平均は3である。分括型は主題文が複数箇所に出てくるので、くどくなりがちであるという弱点がある。次の例は、各段落の終わりに似たような主題文が繰り返し出てきているという点で、その弱点がはっきりと表れている。

### 3. 思い出の残りと言念写真

家族とか、友達とか一緒に旅行に行く時、卒業が近づく時、特別な日に来る時、自分で自分の成長を記憶する時、パーティーを行う時など、思い出を残すのに、どうすればいいと考えてみると。ある人にとって、ビデオのほうがいいと思う、ほかのある人にとって記念写真を撮るのほうがいいと思う。でも、ビデオより写真のほうがいいように、私は思う。

ビデオで、あるの間の動いている状態に基づいて、どこにいて、何をしている、何を話しているなどを表す方法である。時々ビデオの時間が長いかもしれない、長い時間がかかって見ると、人の興味はだんだんなくなって人に反感をもたせるかもしれない。しかし、写真のほうは、前の状況が起きたことはない。写真は、ひと目見てははっきりわかるようにすばらしい瞬間を表す。写真を見る通じて、思い出をぼろぼろ出す。さらに、写真を撮った人の目を通して、様々なものを見ることができるわけだから、私たちは、いわば強化された目で、色彩や形を楽しみ、写真の中で人物や風景や物品を見直すことができる。写真を撮った人の目は、私たちを別な立場、別な体験、そして別な考え方に導き、同時に、そこに普遍的なもの、人間的なものを見出すのを助けてくれる。一例



として、あるのテレビ番組で、児童の笑顔を収集して全国のテレビ視聴者に向け現れる。いろいろな児童笑顔の写真を見ると、日の暖かさのような感じを覆われる。元みなぎで積極的な感覚がする。だから、私は、いいチャンスをとらえてすばらしい瞬間を撮影する写真を通じて、思い出を残すのほうがいいと思う。

ビデオより写真のほうが、保存はもっと簡単なばかりでなく、取り出して見ることももっと便利である。同時に、私たちは、自分の好みによって、自由に写真をきれいなアルバムや他の好きなアクセサリーで飾って、もっと美しく変えられることができる。そうすれば、目や心を楽しませる。または、身に携帯する（例えば、財布に置かれる）写真を、どこでも、いつでも、他の人が来る時、友達に会い時、誇って人に見せて紹介することが便利である。しかし、ビデオはそうすれば駄目である。ビデオを見たいともれば、メディアを利用してはじめて、放送することができる。今、総人口に占める高齢者の比率が増大しつつあるうえに割引が一定に達した社会だんだんになった。老人にとって、複雑すぎる現代の製品はぜんぜんわからなくて、言うまでもなく、上手な使用方法を身につける。だから、私は、多くの人に向け、手取り早い方法として、思い出を残すのに、写真のほうがいいと思う。

そのほかにも、違っている時期の写真を比べて、段階を踏んで一步一步進める変化が発見することができる。古い記憶を呼び覚ますことが容易である。写真の材質の変化に伴って時代が移り変わる感覚もはっきりします。考えが千々に乱して旧時のことをとても懐かしくになる。例えば、毎年誕生日の日の写真を取り出して比べて、身長や顔などは何が変わったのは直接的で容易にわかるように思う。でも、ビデオはその優勢が持っていない。変化をわかるように長いビデオを捜すことは必要があるからである。だから、もしもっと直観的で変化を見たいによって、思い出を残すのは、写真のほうがいいと思う。

思い出を残すのに、異なる人には、それぞれの考えがあると思う。でも、わたしにとって、ビデオ（動画）より写真（静止画）のほうがいいと思う。写真は、すばらしい瞬間に留まって、何とも何とも忘れられない。写真は、すべての人を適えて思い出を残すの方法である。写真は、思い出を残すのに一層便利で簡単な方法である。

では、どうすればよいのだろうか。段落末で主題文を単純に繰り返すのではなく、主題文を異なる表現で言い換え、変化をつけることが有効であろう。

次の文章は、5点の評価がついた文章である。点線の下線を引いた、主題文を言い換えた文が段落末付近に組みこまれることで、説得力が高まる工夫がなされている。

#### 34. 写真について

私たちの人生は宇宙より短いけれど、その中でいろいろな豊かな体験がある。たとえば、学校を卒業する時と誕生日を祝う時と成功を収める時である。年を取ると、若い時の事はすべて思い出になる。思い出を残すために、写真を撮ってもビデオを作ってもいい。私は写真のほうがいいである。

写真は実物だから、大きさは自分の思いによって変わることができる。これによって、写真を財布に家族や友達や好きな人の写真を入れる人が多くなる。重要な人たちの思う時に、彼らの写真を見て、すぐに楽しくなるでしょう。デジタル化の時代に入ってから、いろいろなデータはプレーヤを使って放映することができ、非常に面倒である。この点で写真が便利である。

写真は記念品として思い出を残す作用がある。小学校と中学校を卒業する時に、記念冊というノートを書くのはすごくはやい。皆は記念冊で祝福と別れの話を書いてから、自分の小さい写真

を書いた言葉のそばにはる。何年も経っても、記念冊を開けて、皆の姿をみると、学生時代の楽しさがまぶたに浮かぶ。写真がビデオなどの動画より保存する性能がよい。

記念冊に貼った写真と同じように、学校を卒業する全体の学生も集まって卒業写真を撮ることがある。その点から見ると、思い出を残すに対して、写真が非常に役立つ。それに写真そのものだから、画面は静かだ。これは時代の移り変わることをうまく反映することができる。十五年前撮った写真を持って、写真を撮った所に戻ることがあるのか。時間の移り変わりに従って、同じな場所とはいっても、風景は変わらないではないでしょう。その所で、古い写真を見て同じ所で違っている景物の姿が重なる瞬間、強い対比感が感じさせるに違いない。これは写真だけできる効果だ。

写真は静かな画面なので、私たちは写真を見る時に声を聞くことはできない。歳月が速やかに過ぎ去り、記憶のはっきりしなくなるので、その写真を撮った時に、皆はどんな気持ちを持っていたか、写真を撮っていた時に何のおもしろいことが起きたかなどを一枚の静かな画面を通じて、うまく覚えるのはすこし難しいはずである。しかし、その一枚の静止する写真からこそ、私たちは目の前の画面にこだわらないで、自分の思想や思い出が完全に解放することができる。静かな画面でも、物語を語ることもできる。

私の家族では、元旦の日に夕食を食べた後で、写真集を見るしきりがある。おばあさんが戸棚に置いた写真集を取り出して、テーブルに置く。皆が集まって、一緒に写真集を見る。写真集にはさまざまな写真が並んでいる。大学時代のおばあさんもおじさんたちの合影も小学校時代の私も全部写真集に残っている。家族の発展は写真という時間軸を通じて、完璧に記録される。おばあさんは写真を指しながら、写真を撮った時間と場所を思い出して、同時に発生したことを言う。私たちはおばあさんと一緒に写真の物語に夢中になる。

写真は私たちの成長をいつも注視している老人のようで、皆の一生の中で数えなくてきれいな瞬間をストップモーションになる。それに私たちのために、これらの瞬間を画面にして、大切にしてくれる。写真の中での人と風景を見て、小さいからいまだでの生活の足跡はだんだん鮮明になる。

写真は人間の存在と社会の発展を記録して、証明するものである。写真そのものは思い出を残すための一番よいものである。

点線の下線を引いた前半の三つの文に着目していただきたい。

「私は写真のほうが好きである。」の言い換えとして、「この点で写真が便利である。」「写真がビデオなどの動画より保存する性能がよい。」「これは写真だけできる効果だ。」といった表現が並んでいる。この表現のバラエティが、この文章に説得力を与えている。

また、その直前にこの三つの文の判断の根拠となる事実が示されていることにも注目したい。「この点で写真が便利である。」の根拠としては「(ビデオは) デジタル化の時代に入ってから、いろいろなデータはプレーヤを使って放映することができ、非常に面倒である。」が、「写真がビデオなどの動画より保存する性能がよい。」の根拠としては「何年も経っても、記念冊を開けて、皆の姿をみると、学生時代の楽しさがまぶたに浮かぶ。」が、「これは写真だけできる効果だ。」の根拠としては「その所で、古い写真を見て同じ所で違っている景物の姿が重なる瞬間、強い対比感が感じさせるに違いない。」がそれぞれ示され、文章の論理性を一層高めるのに一役買っている。

また、点線の下線を引いた後半の三つの文にも着目していただきたい。そこには、印象的なエピソードが並んでいる。「静かな画面でも、物語を語ることもできる。」「私たちはおばあさんと一緒に写真の物語に夢中になる。」「写真の中での人と風景を見て、小さいからいまだでの生活の足跡はだんだん鮮明になる。」といった文は、日本語母語話者でもなかなか書けない高度に詩的な表現である。「私は写真のほうが好きである。」ということを読み手は間接的に推論することになり、主題文として直接表現されるよりも印象がひととき深まる。関連性理論で言うところの高い文脈効果が得られるわけである。

もしピア・レスポンスが可能であれば、この文章でディスカッションをしたグループのメンバーは、この文章から議論をつうじて多くのことが学べるだろう。

一方、中括型を選んだ者と、潜括型を選んだ者はそれぞれ2名である。いずれも、説得力を持たせるのはかなり難しいと思われる。

中括型の評価の平均は3である。読み手は通常冒頭部と終了部に主題文が置かれることを期待する。冒頭部に主題文が置かれれば、文章全体の内容について見通しを持って読むことができるだろうし、終了部に主題文が置かれれば、文章全体の内容を最後に確認でき、納得をして読みおえられるであろう。展開部に主題文が置かれる中括型はその意味で中途半端になりやすく、説得力を持たせるにはかなりの技量が必要になる。

さらに、潜括型の場合、そもそも主題文を明示せず、文章全体をとおして主題文を浮かびあがらせるという高度な技法である。日本語母語話者でも扱いかねることが予想され、学習者がこの方法を使うのはかなり挑戦的であり、その志は評価するとしても、一般にはお勧めしがないと言わざるをえない。

## 6. 主張と評価

写真を選ぶか、ビデオを選ぶか、いずれを選ぶかによって評価に影響は出るのだろうか。写真を選択した者は30名で、平均は3.57、ビデオを選択したものは25名で、平均は3.48、選択者も平均も大きな偏りは見られず、適切なテーマであったと思われる。写真のほうが若干評価点が高いのは、写真のほうが想像力を発揮できる余地が大きく、そのぶん説得力が増したためと思われる。なお、両方ともよいと考えた者は5名で、平均点は3.2である。人数が少ないので一般化は難しいが、いずれかを選ぶ課題で、両方ともよいことを限られた紙幅で説得するには、高度な技術が必要であるということであろう。

## 7. まとめ

以上述べてきたことを以下にまとめる。

まず、段落についてであるが、段落分けを行うときには一定の話題のレベルで区切るようにし、段落構成に一貫性を持たせることが重要であろう。また、段落分けを細かくしすぎないようにし、話題のまとまりを明確にする指導も必要である。

また、文章型についてであるが、超絶レベルに達していない学習者には、両括型か頭括型

でしっかり書けるように指導するのが望ましいと思われる。尾括型を使う場合には、冒頭部で焦点となる疑問や観点をあらかじめ示すと読みやすくなるだろう。分括型は主題文を繰り返すのではなく、主題文を間接的な表現に言い換えるようにすると、文脈効果が高まり、説得力のある文章になる。中括型や潜括型は扱いが難しく、一般に避けたほうがよいと指導したほうが無難である。

なお、主張として、写真を選ぶか、ビデオを選ぶかは、評価に若干の差はあるものの、明確な根拠を示すことさえできれば説得力に大差はないので、ここでは割愛したい。

本研究は、筆者の主観に基づくものであり、その点で限界がある。多くの研究者が多様かつ一貫した観点で評価を行い、そうした評価の研究が蓄積されていけば、誤った表現を修正するという誤用研究から、読み手の目から見たよりよい表現を追求するライティング研究へと発展していくことが期待できる。そのための一つの試みとなればさいわいである。

## 付記

本研究は、2013 年度国家社会科学基金項目「大学日語学术论文写作及教材开发的研究」（批准号：13BYY158）、および国立国語研究所基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の研究成果の一部である。

## 参考文献

- 五十嵐力（1905）『文章講話』早稲田大学出版部
- 石黒圭編（2017 予定）『わかりやすく書ける作文シラバス』くろしお出版
- 宇佐美洋（2014）『「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか—評価プロセスの多様性をとらえることの意義—』ココ出版
- 宇佐美洋編（2016）「評価」を持って街に出よう —「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて—」くろしお出版
- 佐久間まゆみ（1999）「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要 文学部』48、pp.1-28、日本女子大学
- 田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート—読み手と構成を意識した日本語ライティング—』くろしお出版
- 田中真理・坪根由香里（2011）「第二言語としての日本語小論文における good writing 評価—そのプロセスと決定要因」『社会言語科学』14-1、pp.210-222、社会言語科学会
- 田中真理・長阪朱美・成田高宏・菅井英明（2009）「第二言語としてのライティング評価ワークショップ—評価基準の検討—」『世界の日本語教育』19、pp.157-176、国際交流基金
- 坪根由香里・田中真理（2015）「第二言語としての日本語小論文評価における「いい内容」「いい構成」を探る—評価観の共通点・相違点から」『社会言語科学』18-1、pp.111-127、社会言語科学会

（いしぐろ けい 国立国語研究所 日本語教育研究領域）